エル・グレコの三枚の絵

松葉　良

スペイン絵画の中で、特にエル・グレコは、独自な世界を歩んだ偉大な画家と言えるだろう。

彼の絵画の中に表現されている幻想と近代性は極めて重要な意義を持っている。

ヴェネチアからトレドへの遠い道を異邦人グレコは辿ったのであるが、荒地の中に浮ぶように出現するトレドの風景をまのあたりに眺めた時、彼は何を感じたのだろうか。

そして何故このような中世的な原風景がグレコの幻想ともいえるブルーの風景に変ったのであろうか。そこにグレコが持つ近代人の眼を強烈に感じることが出来る。

彼の「トレドの風景」に描かれたブルーの色彩はヴェネチア絵画の中で見たマニヤスコの絵画の青であったかも知れない。その青も古典的な遠近法による表現ではなく、飽くまで近代的な色彩による遠近法を見出だしたところにグレコの大きな発見があったと言える。

トレドの風景の持つ重さを画面に定着させることは或る意味で技術によって出来るかも知れない。しかしグレコはこの重さを青い色彩の表現で実在化することが出来たのである。

グレコの見たあるがままの世界から、イメージの世界に変容してゆくものは何であったろうか。それは画家の見た世界を分解し再構成するという現代絵画の持つ一つの重要な問題の中に、グレコが全生命をかけて生きたということに他ならない。

そしてルネッサンス絵画の持つ、空気遠近法による実在化を表現するのではなくて、極めて平面的な手法によりながら、色彩とマッスによって神秘的な世界を見事に表出しているのである。

トレドを訪れて、サント・トメ教会堂に残されている傑作「オルガス伯の埋葬」に接した時、中世のまま時間が止ったような瞬間を強く感じたのである。

グレコは「死とは根源的初原的な静への降下にほかならない」と語っている。

確にこの埋葬図は降下の情景である静が、この埋葬の瞬間に結集され一つの神秘的な瞬間を描きだしている。死者を支える金と赤の衣をつけた二人の聖者達は死者が永久に降下してゆく姿を強調している。そ

してまた五つの手のコントラストは降下してゆくムーヴマンを見事に調和させながら画面の中で息づいている。

その感動は近代の表現主義の絵画の原点を凝視させてくれたのである。

またトレドのグレコ美術館にある「トレドの眺望と地図」は、グレコの最もすぐれた幻想性を表現している絵画の一点であろう。

密度ある画面は上に上にと無限に上昇してゆく。そして空の空間は無限に拡大される。そして色彩の持つフォルムが上昇しながら、或る場合は旋回し、時には下降してゆくのである。そこには、トレドの浄化された原風景が永遠を物語っている。

グレコの歩んだ道、それはギリシアのクレタ島で眺めた、最も素朴な形でアルカイックなビザンチン美術、そしてまたヴェネチアに移り住み、そこで目にしたヴェネチア美術の色彩が、彼の内部でどのように形成されていったのであろうか。

特にヴェネチア美術から学んだであろう色彩は彼の生涯の全作品の主要な要素となっている。

グレコの絵画はルネッサンス美術の中に於いては極めて異質であり、バロック美術に変形する何ものかを持っている。

その何ものかがマニエリスムの表現を通って、現代のジャコメッティが彼の彫刻で求めている永遠の世界に通じる厳しい視点を強く感じさせるのである。

（写真は「オルガス伯の埋葬」）